

# 日常と水

- 世田谷における水道道路を軸とした都市の再編 -

法政大学大学院

間瀬口 純一

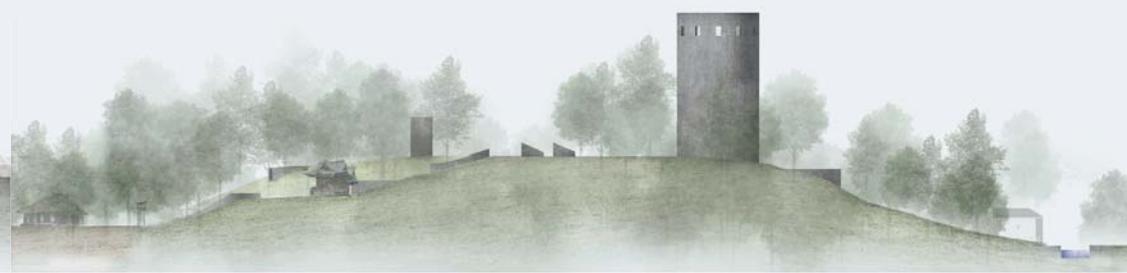


水や電気といったインフラは、都市的で大きな拡がりを持ち、様々な場所と関わり合い、街に存在しています。

近年、震災や多くの自然災害を通して、私たちのインフラへの意識の希薄さが露呈されました。

そこで、「水道」という身近なインフラに着目し、水道の存在を、建築によって可視化させることで、街の指標としての新しい価値を与えます。

そして、そこにつくられた2つの建築がつくり出す新しい風景は、世田谷の歴史を継承し、水の存在を人や都市へ伝えていきます。



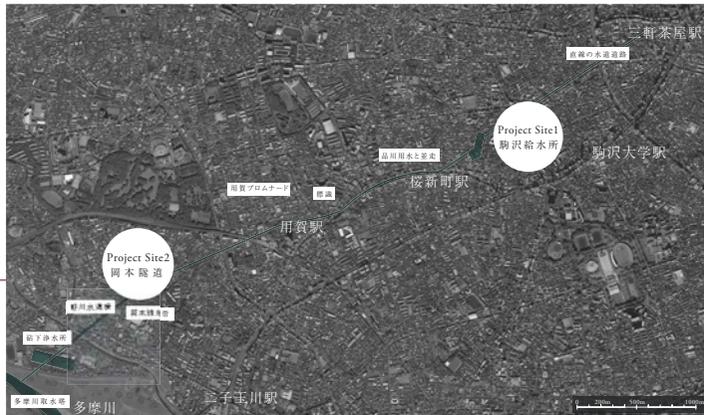
## 01.SITE

### 渋谷の発展を支えた水道

田畑が多く存在していたかつての世田谷は、水が豊富な土地であり、現在の品川区、渋谷区、大田区などへ水を運ぶ用水路が整備され、水の通り道として様々な都市の発展を支えてきた。その1つ、世田谷を横断する渋谷町営水道に着目する。



1kmの用水路が通る世田谷区

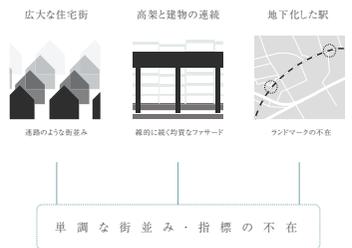


水道道路L1に存在する建群と、設計施設2つの位置関係

## 02.SITE SURVEY

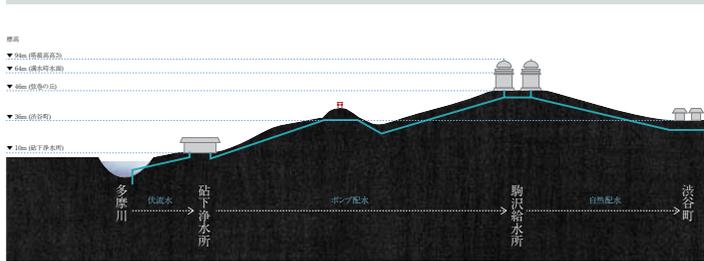
### 世田谷の都市構造—単調な街並み—

対象地域とする右上図のエリアは住宅地が殆どの都市機能を占めており、地形以外に場所による差異があまり見られない。そして以下の3つ特徴が街の指標を失わせているといえる。



### 旧渋谷町営水道について

<p><b>1923</b> 渋谷町エリアの給水施設として 当時の渋谷町が、多摩川→駒沢分水橋→駒沢給水所→渋谷の町へ配水していた。1人あたり1日最大110リットルの給水量、15~20万人を配水した。</p>	<p><b>1932</b> 機能拡張のため都の管轄へ 渋谷区の人口拡大に伴い、機能を拡張するため、渋谷区から都の管轄へ移行される。</p>	<p><b>1999</b> 給水所の機能の停止 給水方法の進化などに伴い、駒沢給水所のポンプが停止される。それと同時に給水所としての機能を終え、非常用の水を蓄える施設へ転換する。</p>	<p><b>2012</b> 歴史遺構の評価と保存活用 駒沢給水所のポンプ所と給水塔が土木学会重要土木遺産に認定される。これからの整備について議論がなされている。</p>
--	--	--	---

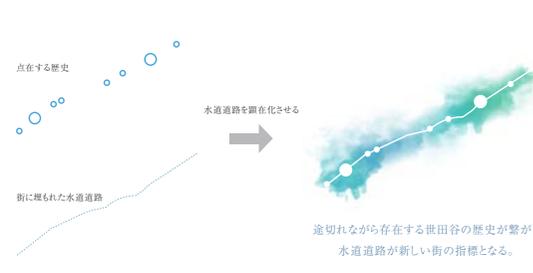


水の流れと水道施設の位置関係

## 03.THEME

### 水道道路を顕在化させる

街に埋もれた水道道路を顕在化させることにより、新しい軸として位置づけると同時に、点在する近代化遺構を街の目印に、点在する世田谷の記憶を過去から現在へつなぎ、人々の拠り所としての都市軸へ読み替えていく。



途切れるながら存在する世田谷の歴史が繋がり、水道道路が新しい街の指標となる。

## 04.PROJECT SITE

### 水道が通る丘に2つの建築をつくる

水道道路が貫いている、2つの丘。「丘」という都市の中で求心の場所に着目する。そしてそこに存在する「給水所」と「公園」という2つの水道の目印を建築によって顕在化させる。



## 05.COMPOSITION DIAGRAM

### 水道施設と日常を繋げる図式

「給水所」と「公園」という2つの水道施設の施設形態をもとに、水道施設を可視化していく。キーワードとして抽出された「閉鎖」「埋没」を基本形態とし、丘の風景を継承するように空間を拡張し、機能を決定し、人々の日常に接続していく。

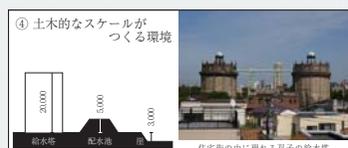
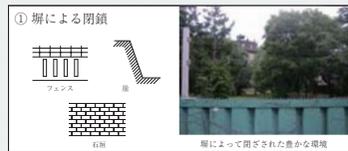


PROJECT1 <給水所>				PROJECT2 <公園>			
場所としての建築	施設形態と丘の空間的拡がり	駒沢給水所	PHASE	園本静嘉家跡地	施設形態と丘の空間的拡がり	公園としての建築	Program
Program 住宅街に接続する機能 ・住宅 ・コモンスペース ・認知所/アイケアセンター ・カフェ/リビング/キャタリー ・カフェ/コモンディニング ・カフェ 東京都水道局世田谷営業所	閉鎖性を保つ形態	閉鎖	AREA	Park	埋没	地下に展開する形態	歴史資料館 渋谷町営水道の展示 世田谷区の歴史展示 多目的展示室 展望台 カフェ
		Surrounded	SHAPE	Buried			
		Guarded	HISTORY	Abandoned			
		High	DENSITY	Low			
		New	TOWNSCAPE	Old			
		Horizontal	LANDSCAPE	Vertical			

06.SITE READING

駒沢給水所 - 閉ざされた豊かな環境 -

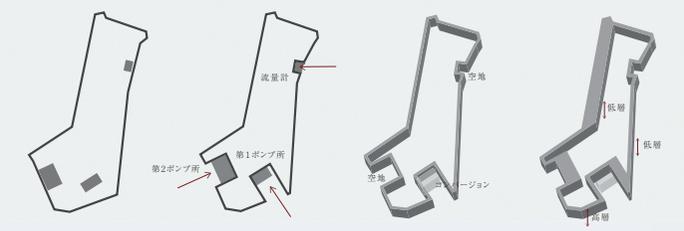
自然配水を用いて洗給給水を行っていた当時の利用されていた施設。現在は機能的に必要ではないが異常時の非常用の水として水が貯水されており、インフラ施設として厳密な整備のもと、人が寄り付かない場所となっている。そして、豊かな自然の中にポンプ所や計量所などの魔屋が点在し、豊かな環境が詰まっている。



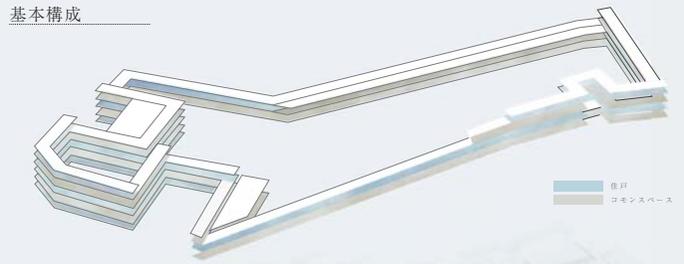
07.DIAGRAM

塀を建築化する

1. 敷地全体に塀をめぐる
2. 機能停止した建物を外へ吐き出す
3. 幅5mの建築を立ち上げる
4. 敷地内外の環境にあわせる



基本構成



給水所敷地



08.SECTION

丘の拡がりを読み替えたスロープの構成

塀を建築化し、水道施設の形態を浮かび上がらせる。敷地内部の環境に呼び替えるように建築を変化させ、周辺環境と連続するようなボリューム構成とする。また、敷地内部は基本的に閉鎖された状態を保持し、配水池等は一部開放し、人々は内部の環境に触れることができるようになる。



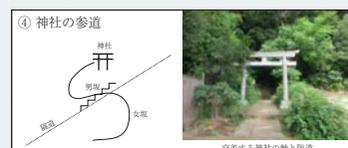
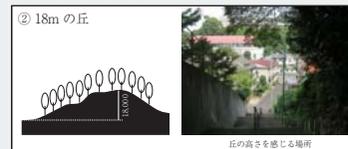
- 1/100 勾配で広がるコンソンスペースの道
- コンソンスペースからの住戸アクセス
- 住戸の層を貫く垂直動線
- 公共スペースを分節する住戸プラン

A-A' 断面図

06.SITE READING

岡本静嘉堂緑地 - 集積する歴史 -

かつては岩崎家が所有する庭園であった緑地。戦後は手がつけられず、ほぼ自然状態のまま貴重な自然が残されている。神社、文庫、美術館、納骨堂、民家園など、様々な歴史が集積する場所であるといえる。小高い丘の地形であるが、景色を見渡せる場所はない。



08.SECTION

地中から地上へ広がる断面構成

隧道を建築化し、地下を中心に建築を構成していく。基本のボリュームを隧道と給水所の塔構成から形成し、そこに重なるように日常の「道」のレイヤを重ね合わせ、空間を拡張するようにグリッドを広げる。道や塔の構成を映し込んだ建築は地上にも新しいランドスケープをつくり出していく。



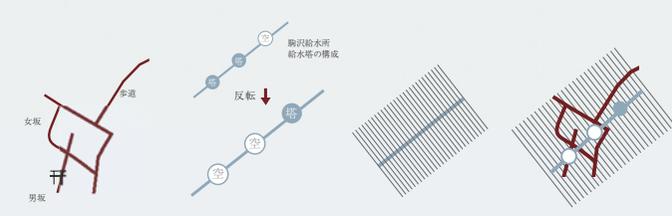
- 地上に生まれる屋外広場
- 対照的な風景が広がる展望室
- 隧道が露出する展示室

断面図

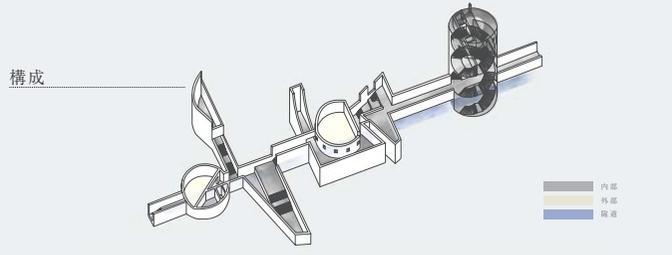
07.DAIGRAM

隧道を建築化する

- 日常のレイヤー + 水のレイヤー + 空間を拡張するグリッド = 立体的に重なり合う



構成



隧道敷地





① 空地に接する場所は静かなプログラムが入る

② 給水所敷地の建物で囲われた場所は屋外広場となる

③ 住宅街に現れる景



